

伝統工芸品の展示

たくみ いっ ぴん どころ
匠の粋品処

深川江戸資料館にオープン

これまで森下文化センター(森下3-12-17)2階に設けられていた「^{たくみ}工匠^{いちばんかん} 壺番館」の閉館に伴い、深川江戸資料館(白河1-3-28)常設展示隣に「匠の粋品処」を開設しました。



下町文化



KOTO City in TOKYO
スポーツと人情が熱いまち 江東区

NO. 278
2017.7.5

発行

江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL.(03)3647-9819
http://www.city.koto.lg.jp/

- 伝統工芸品の展示
匠の粋品処
深川江戸資料館にオープン
- 区内文化財をたずねて
～説明板をめぐる「小さな旅」～
- 閻魔堂橋と橋銘札
- 江戸の町内探訪⑩
黒江町
- 城東の村を歩く⑨
又兵衛新田
- 第35回(平成28年度)時雨忌記念講演会録
芭蕉一世の十句
- ココにも歴史があった
平成28年度寄贈資料の展示

職人の技を知る

長い歴史を経て、現代に伝えられた技。伝統的なその技を受け継ぐ人は職人と呼ばれます。区内には、現在も多くの職人が居住し、仕事を続けています。しかし、その技術を一般の方が目にする機会はほとんどありません。そのため、「匠の粋品処」は、狭いスペースながら、職人の技への理解を深めていただく場として、「工匠壺番館」に代わり、深川江戸資料館の常設展示隣(有料スペース)に新たに設けられました。

同館の常設展示は、江戸後期の深川佐賀町の一部(商家や長屋など)を再現したものです。この時代は、商品経済が著しく発展し、さまざまな物が商品として流通しはじめました。江戸の町で人々の暮らしを支えたのは、それらを作っていた職人にほかなりません。人々は長屋などに住み、自宅で、あるいは仕事場でモノづくりに従事したことでしょう。そんな街並みを体感したあとに、当時の職人の姿に想いを馳せつつ、その技術を受け継いだ展示品をご覧ください。ご覧ください。

深川江戸資料館にご来館の際は、「匠の粋品処」の展示作品をぜひご覧ください。

区内文化財をたずねて

説明板をめぐる

「小さな旅」

江東区教育委員会は、これまでに区指定文化財や登録史跡の所在地にその由来や変遷などを紹介する文化財説明板を設置してきました。平成28年度は2基を新たに設置しました（前号277号）。その全てを見た方は少ないかと思えます。

そこで今回は区内各所にある文化財説明板を紹介します。街中で見かけた時の参考にしてください。

指定文化財説明板と史跡説明板

現在、区内には指定となっている有形文化財・有形民俗文化財が35件あります。説明板には、解説の他に写真・拡大写真1

絵図なども付けています（写真1・上段が解説、下段が写真）。写真などを加えることで、普段は見る機会



写真1 指定文化財説明板「石造燈台台」
(深川公園内)

が少ない文化財、さらに現在では見ることのできない往時の姿を紹介しています。

一方で史跡とは、江東区の歴史の正しい理解のため欠くことができず、かつ学術的な価値のあるものを指します。江東区には254件あります。



写真2 史跡説明板「逆井の渡し跡（亀戸9丁目）」

写真2の説明板は「逆井の渡し跡」（亀戸村と西小松川村（江戸川区）を結んだ中川の渡し・亀戸9-12（江戸川区）の説明板です。この説明板では歌川広重（1797～1858）による「名所江戸百景」など浮世絵・絵画が用いられており、文章だけではイメージしにくい史跡についての理解を助けています。

二カ国語表記の説明板

また、区では一昨年より二カ国語表記（日本語・英語）による説明板を設置しています（写真3）。下段の英文の表記は、上段の日本語の説明を要約

江東区登録史跡 採茶庵跡

拡大写真2



写真3 二カ国語表記説明板「採茶庵跡」（海辺橋南西側橋台地）上段が日本語、下段が英語です

したもの。興味をお持ちの方は、神社・俳句をはじめとする日本文化史上の用語がどのように英訳されているか、見てください。

文化財愛護のシンボルマーク

さて、ここまで文化財説明板を紹介しましたが、写真1・3の説明板には文化財愛護を象徴するマークが入っています（拡大写真1・2）。このマークは、ひろげた



文化財愛護
シンボルマーク

両手の手のひらのパターンによって日本建築の重要な要素である斗椀（とぎょう）を表し、これを三つ重ねることで文化財を過去、現在、未来にわたり永遠に伝承してゆくと

う愛護精神を象徴しています。

文化財説明板を守る活動

一方で江東区内にはこれらの説明板を守る、自主的なグループがあります。そのグループは、江東区文化財保存愛護会（以下、愛護会）といえます。

愛護会は、4月から11月までの期間、月1回地域を決めて、文化財説明板をはじめ、各種標識・石碑・モニュメントの清掃活動を行っています（写真4）。



写真4 愛護会の清掃活動の様子

文化財説明板を全て見て回ることは、難しいかも知れません。でももし街中で見かけた時には、是非一度読んでみてください。

こんな場所に文化財があったのかとあらためて文化財への関心を深める機会にしたいだかと思えます。さらに文化財説明板を通じ、文化財の保護、地域の歴史に関心をもっていただければ幸いです。

（文化財専門員 功刀俊宏）

閻魔堂橋と橋銘札

橋銘札

左の錦絵は、明治6年（1873）に中村座で初演された歌舞伎「梅雨小袖昔八丈（髪結新三）」の一幕を描いたものです。恨みを晴らそうとする弥太五郎源七（左側）に迫られた新三（右側）が、「ちようど所も寺町に娑婆と冥土の別れ道、その身の罪も深川に橋の名さえも閻魔堂、鬼といわれた源



「梅雨小袖昔八丈」(東京都立中央図書館特別文庫室所蔵)

七がここで命を捨てるのも、餓鬼より弱い生業の地獄のかすりを取った報いだ」と捨て台詞を吐く場面です。

台詞に出てくる閻魔堂橋は油堀に架かっていた富岡橋のことです。近くの法乘院閻魔堂（現深川2）にちなんで地元では「閻魔堂橋」と呼んでいました。錦絵を見ると、新三の右腕越しに「ゑんま堂橋」と書かれた木札に気がつきます。これを橋銘札と言います。

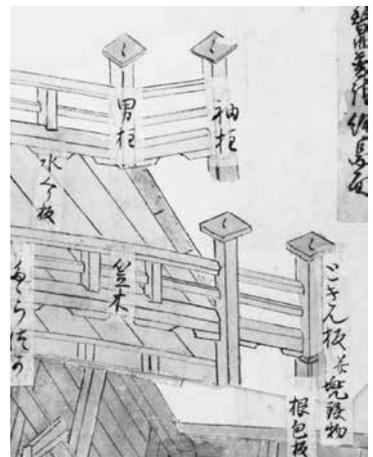
往来人の便利を考えて

江戸時代も末の弘化2年（1845）4月8日、町奉行所は江戸向や本所深川の町々へ、往来人の通行便利のために、橋の男柱か袖柱（下図参照）に橋銘札を付けるように命じています（国立国会図書館所蔵「嘉永撰要類集」）。

奉行所が示した橋の一覧には、江戸向では御入用橋28橋と町入用橋46橋、本所深川では御入用橋48橋と町入用橋22橋があげられています。ただし、高欄などの無い石橋や小橋・板橋、また武家や寺院など支配違いの橋については対象外とされています。

町奉行所は一覧に洩れがあるならば申し出るようにと命じ、また本所深川の町々へは、自分橋や入堀橋などで往来に便利だと思われる場合は同様に札

「深川元木橋掛替御普請絵図面」(部分)
(国立国会図書館所蔵)



を付けるように指示しています。

なお、掘割を往来する舟のために橋杭にも札を付けることが検討されましたが、舟で往来する人は船乗り任せであるし、そもそも堀筋を覚えることは船乗りの心得であるから要らないということになりました。

橋銘札を付けない橋

ところで一覧には肝心な橋たちが載っていません。それは日本橋・江戸橋・京橋・両国橋・永代橋・新大橋・大川橋です。当初、これら7橋についても橋銘札を付ける予定でした。地方の人が江戸に来た時に便利なようにすべての橋に札を付ける方針であったからです。しかし町奉行配下の本所方や定橋掛から異論が出されました。彼らは、7橋は小橋と違って多くの人がその名を知っており、他の橋と同様に普通に札を付けては御府内の者たちから

批判を浴びるだろうと言うのです。江戸を代表する7橋は御府内の人々にとって格別なものと思われていたのでしょうか。

橋銘札の書き方

橋には、本銘の他に、富岡橋のように「閻魔堂橋」といった地元で言い習わされている里俗銘を持つものもあります。通用している里俗銘を採用した方が便利であるとの意見もありました。結局本銘を札に記すことにしました。里俗銘は地元限りのことであり、本銘を忘れないようにとの配慮からでした。なお、本銘が無い橋については、里俗銘がある橋は「何町合何町江渡ル字何橋」とし、それが無い橋は「何町合何町江渡ル橋」とされました。

そうすると錦絵に描かれた閻魔堂橋には実際は「富岡橋」と記した橋銘札が付けられたと思われれます。ただ、錦絵は芝居の世界が描かれたものです。舞台は、繁華な門前町と清閑な寺町とを隔てる油堀端で、しかも近くには冥界の閻魔が鎮座する御堂があります。「娑婆と冥土の別れ道」という台詞がすんなりと納得できる土地柄であり、油堀に架かる「ゑんま堂橋」はその雰囲気象徴するものとしてふさわしい名であったと思われれます。

(文化財主任専門員 栗原修)

「黒江町」

今回取り上げる町は黒江町（福住1・門前仲町1・永代2付近）です。この町は、深川南部に位置し、開発として堀割の開削などにより複数ヶ所に分かれました（図）。なぜそのようになったのか。もとの黒江町はどこにあったのか。一部推測も含めながら、町の歴史を紐解いていきたいと思えます。

黒江町成立の経緯と黒江川

『寛永録』（東京都公文書館所蔵）に記された町成立の由緒によれば、黒江町は、寛永6年（1629）に助右衛門なる人物により開発されました。同町は、深川南部に展開した獵師町八ヶ町の一つで、当初は助右衛門町と称しました。他の七ヶ町は弥兵衛町（清住町）、次郎兵衛町・藤左衛門町（佐賀町）、新兵衛町（相川町）、利左衛門町（熊井町）、助十郎町（諸町）、彦左衛門町（富吉町）で、いずれも当初は開発者名を町名としましたが、元禄8年（1695）頃に黒江町も含め（）内の町名に改められました。

文政11年（1828）に成立した幕府の編纂物『町方書上』には、黒江町の名は町の北を流れる「黒江川」から

名づけられたとあります。

次に、開発に関わる記述を、同書から抜粋いたします。

・元禄十式卯年（中略）南の方、町屋裏通川筋、堀割の砌（中略）同十三辰年中、当町久中橋向北の方にて、地面続西角元木挽町六丁目木置場の処、並東角海辺新田の内、北川町続木挽町四丁目木置場の所

この史料から、次のことがわかります。一つは、元禄12年（1699）に黒江町の南側に堀割が掘られたこと、翌13年には堀割となった場所の代地として、久中橋向いの西角（元木挽町6丁目）④と東角（海辺新田の内）⑤、さらには北川町続きの土地（木挽町4丁目）⑥が与えられたことです。このように、④⑤⑥は、元禄12・13年に幕府から与えられた代地でした。では、①②③はどうでしょうか。代地は黒江町の南側の土地を御用地としたことに對するものですので、南側に堀割のある町、すなわち①が当時の助右衛門町と推測できます。また、「当町久中橋向」の西・東に代地があるとの記述は、③も助右衛門町の一部で

あつたことを窺わせません。そして、その間に位置した②も併せた①②③までを含む、一定範囲が本来の助右衛門町であつたと考えることも可能でしょう。

いずれも推測の域をでませんが、明暦大火（1657）直後の成立と考えられる「江戸大絵図明歴」（公益財団法人三井文庫所蔵）には、①③の場所にいずれも武家の屋敷があり、②付近は「町」と記載されています。この絵図と『町方書上』には、170年もその時の経過がありますが、仮にこの②が黒江町であつたとしても、①③が黒江町として成立した時期については明確ではありません。今後とも慎重に検討を加える必要がありそうです。

「町内里俗之唱」について

町内とは黒江町、里俗とはそこに住む人々の意味です。ここでは、『町方書上』の記述をもとに、19世紀当初に黒江町の住人が町内各所をどのように呼んでいたのか紹介いたします。

はじめに黒江川に関する記述を取り上げると、

黒江橋際より八幡橋際迄の内、一円
黒江川と唱えていたことがわかります

と記され、黒江橋から八幡橋までを

⑦。この付近の川に面した河岸通りを「浜拾三町」と唱えていたとあります。

他は、八幡橋通り⑧に面した町を「通り黒江町」、坂本町代地の向いの町を「東黒江町」④（⑤も含むか?）、久中橋と黒江橋に至る南側の河岸通りを「日影町」③、西念寺脇横丁を「西念寺横丁」⑨と唱えていたようです。

このように、黒江町は、開発とそれ

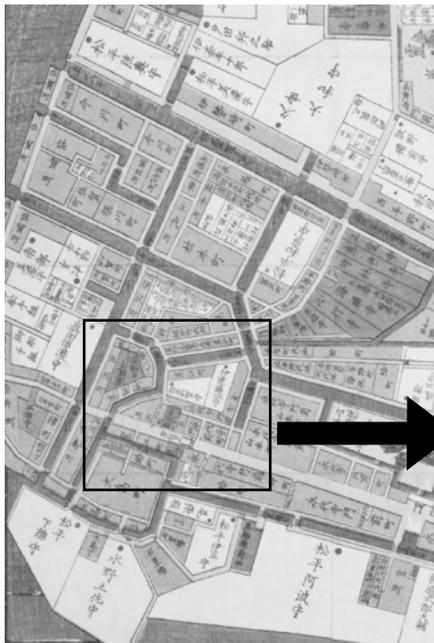
にともなう代地の付与などで複数に分かれました。そのため、町の住人は、町や河岸通りなどに名を付け、分かりやすくしたと考えられます。このこと

は、他の深川南部の町にもみられること

から、この地域を考えるうえでの手

掛りの一つといえるでしょう。

（文化財主任専門員 出口宏幸）



本所深川絵図(部分) 国立国会図書館デジタルコレクション

城東の村を歩く⑨ 又兵衛新田

又兵衛新田は、小名木川をはさんだ対岸の小名木川村の村民又兵衛が開発したとされる村です。その名の通り、村名は開発人に由来しています。開発された年代ははっきりとしていませんが、幕府が元禄13年から15年の間(1700〜02)に作成を命じた村台帳の「元禄郷帳」で初めてその名が確認できるため、成立したのはそれ以前ということになります。

陶首稲荷と永福寺

しかし、『南葛飾郡神社要覧』に掲載された又兵衛新田鎮守の陶首稲荷(東砂2-14-5)の由緒によると、寛永年間(1624〜44)初めに開発された時に鎮守として祀られたとあり、開発時期は寛永期までさかのぼる可能性があります。

この陶首稲荷には歴史的な石造物が残されており、天保15年(1844)の庚申塔(区登録有形民俗文化財)と嘉永3年(1850)の水盤(前同)があります。いずれも奉納者に「又兵衛新田」とはっきり明記はされていませんが、地域の神社が江戸時代から続



庚申塔 天保15年在銘

いていたことを示唆する貴重な文化財です。

さらに村内にあった天台宗寺院の永福寺は、「新編武蔵風土記」によると開山(お寺を創建した住職)の宥真(かいせん)が寛永10年に亡くなったとされており、ここからもこの土地が寛永期にはお寺ができる所(つまり人が住んでいる所)となっていたことがうかがえます。

永福寺は、太平洋戦争末期の昭和20年(1945)に戦災で焼失してしまい、現在は墓地のみが残されています。その墓地の中には、永福寺歴代の住職の墓5基が残されています。墓石には、承応3年(1654)・延宝7年(1679)・寛延4年(1751)・寛政10年(1798)・文化5年(1808)の年号が記されており、少なくとも永福寺が17世紀半ばには又兵衛新田のお寺として存在していたことを示しています。これらの墓石は、

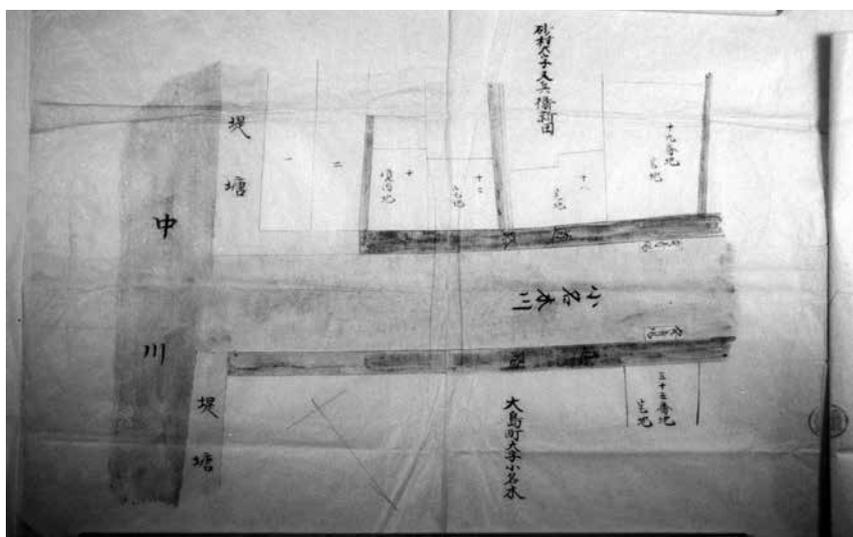
現在は区内からなくなってしまったお寺のよすがとなっています。

草屋の渡し

もう一つ、又兵衛新田にまつわる文化財が、小名木川に渡されていた草屋の渡し跡(区登録史跡)とその関連資料の斎藤家文書(区登録有形文化財)です。草屋の渡しは、小名木川の南北(現大島8-39・東砂2-13)をつないでいた渡船場で、明治17年(1884)に又兵衛新田の住人斎藤豊次郎が開設しました。

当時はまだ、小名木川に架けられていた橋も少なく、渡船は地域住民の貴重な移動手段となっていたと思われれます。「渡船営業願書」には、人1人金1厘5毛のほか、牛馬1頭につき

金1銭と利用料が設定されており、明治半ばの城東地域がまだ農村風景を残していたことを物語っています。のち明治40年に丸八橋と進開橋が架橋され、渡しの利用は減少しましたが、営業は昭和10年代まで続きました。又兵衛新田の歴史を直接的に物語る史料は少ないですが、残された文化財からは地域の歴史に思いをはせるロマンを感じられることでしょう。



渡船場図面(斎藤家文書)

(文化財専門員 斎藤照徳)

芭蕉二世の十句

講師 西村 和子(「知音」代表)

今日は皆さんの手許にあるレジューメ、「芭蕉」世の十句」を元に、お話ししようと思います。なぜこの題にしたかという、松尾芭蕉がこういう言葉を残しているからです。「一世のうち秀逸の句三、五あらん人は作者也。十句に及ん人は名人也」

若汁の手ぎは見せけり浅黄碗あざざわん

浅草にいた門人粕谷千里あさざわんに、おもてなしをうけたときの句です。芭蕉が故郷の伊賀上野で最初に奉公したときは、お殿様の台所方でした。若汁は、海苔のお吸い物です。海苔のお吸い物は作り置きするものじゃない、さっと作る。ぱつと散らした、海苔の香り、その潔さ。浅草海苔は江戸時代からの産物でしたから、乾いた海苔ではなく生海苔ではないか、そういう感じがします。しかも浅黄碗です。京都の二条新町で作っていたという、黒漆の上に



夕方の空のよ
うな水色、縹
色で塗り、色
とりどりに花
鳥を描いたお
碗です。勢い
のある句で

す。料理と俳句は似ています。材料はみな同じです。句のものを使う、熱いものは熱く、冷たいものは冷たく、包丁の入れ方、まさに手際見せけり、です。調理の仕方であつた違う料理ができる、皆で同じものを見ていても、違う俳句ができる。

さまぐの事もひ出す桜哉

芭蕉45歳、元禄元年の作です。この句の背景には、芭蕉が最初に奉公した殿様、早逝してしまつた藤堂良忠の子、藤堂良長が催した花見の様子があります。この句を読むと、年とともに深まる思い出、桜によって思い出されること、年を重ねてわかるもの、などを思っています。読み手が自分の人生経験に照らし合わせることができ、現代の私たちの心にも、響いてくる句です。

行く春や鳥啼き魚の目は泪

『おくのほそ道』の旅立ちの句。皆が私との別れを、旅立ちを惜しんでいる。また会えるかどうかからないという思いで見送っている。鳥は啼いて魚の眼にも涙がみえる、という句です。私は『季語でよむ源氏物語』という本を書いているときに、『源氏物語』と『おくのほそ道』を比べて気づいた

ことがあります。それが『おくのほそ道』の本質ではないかと思われ、ぜひ聞いてください。

『源氏物語』の「須磨・明石」の段では、光源氏は都を離れ、自ら須磨、明石へ身を隠すことになり、親しい人々との別れを惜しむ場面が続きます。

- ・ 弥生二十日過ぎ
- ・ 有明の月
- ・ 名残の花(桜)を惜しむ
- ・ 舟で旅立つ
- ・ 胸がふさがりながら
- ・ 三千里の思い
- ・ 離別の泪

このように、光源氏と芭蕉の「旅立ち」には共通点があるのです。

源氏は罪を得て須磨明石へ行き、そこでひとまわり大きな男性に成長して、都によみがえつた。これは、「貴種流離譚」といつて、貴い生まれの人物が都(中央)から離れ、放浪して戻ってくる、という物語のパターンです。日本文学にはこの「貴種流離譚」の伝統があり、その代表が光源氏で、芭蕉もそうなのだと思います。現代になつて芭蕉記念館ができ、芭蕉の旅をたどる人々がいいます。『おくのほそ道』を書いたこと、俳諧の表現者になつたことで、芭蕉は永遠の命を得たのだと思ふのです。そういう背景を考えても含蓄にとんだ句ではないか、と思つて

いただける嬉しいです。

数ならぬ身とおもひそ玉まつり

芭蕉は、生涯独身でこともいませんでした。身近にいた寿貞尼という女性の存在は、今でも謎のひとつです。この句は、寿貞尼が亡くなつたと聞いて霊まつり、つまりお盆に作つた句です。大事な人に対する思いがこめられていた句だともいいます。あなたは、自分の存在を数ならぬ身、つまらない存在とは決して思つてはいけないう、と言っている。寿貞尼が、自分のようなものは数ならぬ身であるから、あなたの活躍を陰ながら祈つています、お守りします、と言つたのではないのでしょうか。亡き寿貞尼の魂に呼びかけているのです。芭蕉は恋愛もしただろうし、人間の心の機微を知っている人だろうと思います。

杜若われに発句のおもひあり

杜若の季語がきいている句です。『伊勢物語』で、三河の国の八橋に行つたときに咲いていた美しい花をみて、その花の名を「かきつばた」と聞き、それでは「かきつばた」の五音を上においた歌を作ろう、と在原業平が言います。また、この八橋の近くの宇津の山には、山へ分け入る細い道、「鳶の細道」という歌枕がある。私は『おくのほそ道』はこの「鳶の細道」から考えに違いないと思います。杜若われに

発句のおもひあり、とは、歌人が詠んだ「杜若」を、私は発句で詠んでみようというものです。それだけではなく、「宇津の鳶の細道」と『おくのほそ道』の響き合いを考えると、俳諧という文芸において、伝統的な日本文学の系譜に連なるろうという思いを、感じ取ります。『おくのほそ道』を自分がたどってみて、一番感じたのはそのことです。歌枕で有名な場所をたどりながら、歌に負けない、良い俳句を詠もうという思いだったのだと。そして、それが、たんなる言葉遊びに墮落していた俳諧を文学にしたのです。私たちも芭蕉の志をついで、片隅の文字であつても高い志をもって俳句を作っていきたいなと、俳句を作る身として、そういうことをこの句に感じます。

笠島はいづこさ月のぬかり道

『おくのほそ道』の笠島の段です。集中豪雨でしょうね、五月雨のなか道が悪くなっているのをずっと歩いて疲れ果ててしまい、とうとう寄れなかつた、行けなかつた、でも俳句を詠んでいったんです。なぜ行かなかつたところ、句を詠んだのか。それは、藤中将実方の塚はいづこ、とそこへ行きたかつたのです。

藤中将実方は、藤原実方のこと、平安時代中期藤原氏の生まれ、名門の貴公子です。時の帝に寵愛されて、勅撰

集に67も歌が残っており歌人としても認められ、順調に出世していましたが、995年に、突然陸奥守に任命されました。この人事は当時の人々にも謎の左遷と思われるらしく、いくつも伝説が残りました。

私が実方塚を訪れたときは、蝶々がいつびき後をつけてきたのでした。まさに実方の魂だと思えました。「かくとだにえやは伊吹のさしも草 さしも知らじな燃ゆる思ひを」燃える思いをあなたは決して知ることはないだろう、というクールでニヒルで自尊心が高いしかし情熱にあふれた、実方の歌です。塚の上には、藤の花が散っていました。塚はあれど墓標はない、藤原だから誰かが藤を植えたのかもしれない。芭蕉は、さぞここへ来たかつたらうなと思いました。

夏草や兵どもが夢の跡

『おくのほそ道』平泉の中尊寺、高館の句、大変有名ですね。芭蕉は、藤原三代の時代から500年後に、平泉を訪れました。そしてこの場所で「時の移るまで涙を落とし侍りぬ」時は、当時は2時間ですので、2時間ずつと涙しながら竹んでいたのです。句のあとにつづく光堂の文まで、すべてあわせて文字数は400字足らずです。

そのなかに、500年の時の経過と、芭蕉自身が過ごした2時間を、雄大な

時間の流れとして力をこめて書いています。文とともに味わいたい名句です。

あか／＼と日は難面もあきの風

秋の句です。『おくのほそ道』越後路から金沢の海岸線で詠んだ句です。日本の季節の移り行きをよく表しています。日本の季節は、乾季から雨季へとふうに、突然季節が変わるわけではなく、ゆきあいの時期がある。立秋が過ぎたというのに、太陽はあかあかとつれないまでに照っている。この「つれなくも」はいつまでも平行線、歩み寄らない、知らん顔をする、という意味で、辛い思いをさせているという意味ではありません。秋になっても暑い、しかし、風は秋である。古今集の「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」を下敷きにしているのです。はつきりと目には見えないけれど、風の音に秋を知ることができる。ああ、次の季節に入っているのだという気づき方をさりげなく詠んでいます。立秋を過ぎると、この句を思い出します。

しら露もこぼさぬ萩のうねり哉
満開の萩の花に露が降りている。萩の花はさかりで、白い露がびっしりとついているけれど、それは露さないうねりがエネルギーです。この句は元禄6年に詠まれた句で、芭蕉最晩年の句でもあります。うねり、という

言葉はなかなか出てきません。力を感じ取って出て来る言葉だと思えます。

月はやし梢は雨をしながら

この句も、月を見るたびに思い出す句です。本当は月は静止していて、雲が動いている、雲が急いでいるのだからとわかりますが、月が速く見える。表現者の眼です。梢にはさつき降った雨の滴があります。煌々と輝る満月よりも、こういう月のほうが印象的だと思います。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

最後は辞世の句です。辞世ではない、という説もありますが、辞世と受けたい句です。この句も、最後まで芭蕉は推敲に推敲をかさねていて、こういう形もありました。

旅に病んでなほかけ廻る夢心

旅に病んで枯野を廻る夢心
私の選んだ、芭蕉一世の十句はいかがでしょうか。次に十句を選ぶときは、また違う句を選ぶかもしれませんが、皆さんも、これを機会に、ご自分が選んだ十句を書きぬいてみてください。書き写すということは大事です。小説や詩では長くて難しいけれど、俳句だから書き写して覚えることができます。「自分が選んだ十句」をなさってください。

平成28年10月9日
於…江東区芭蕉記念館

平成28年度寄贈資料の展示

文化財係では、「こうとう情報ステーション」(区役所2階)のミニ展示コーナーにおいて、当区教育委員会所蔵の歴史資料を月ごとにご紹介しています。展示品は、区民の方々からいただいた資料を中心に、古写真、絵葉書なども交えています。ここでは、平成28年度に実施した12回の展示(表参照)のうち、2つを取り上げ振り返ります。

【戦前のラジオ受信機】(第1回)

展示品は、東京の大森にあった山中電機株式会社(大正10年創業)製の真空管ラジオ放送受信機で、深川の寺院

で使用されていたものです。

商品名は「TELEVIAN(テレビアン)E11型で、昭和14年に発売されたようです。前面左下に黄色



ラジオ受信機

展示品は、東京の大森にあった山中電機株式会社(大正10年創業)製の真空管ラジオ放送受信機で、深川の寺院で使用されていたものです。商品名は「TELEVIAN(テレビアン)E11型で、昭和14年に発売されたようです。前面左下に黄色の丸いシールが貼ってあり

の丸いシールが貼ってありますが、これは日本放送協会(NHK)が認定したことを示しています。受贈時にはすでに背面パネルが付いていなかったこともあり、スピーカーや真空管(音を増幅させる電球状の部品)などの配置状況がよく見えます。

【柳行李の鞆】(第5回)

明治中期以降、行李を使つた旅行鞆が販売されていました。材料のほとんどはコリヤナギ(行李柳)が占め、他に竹と皮革(把手や名札入れ、角の保護部分)が部分的に使



われています(なお、3本の革バンドは失われていました)。把手の脇に配されている革には「井桁に藤」の焼印が押されています。これは、松坂屋の商標「いとう丸」を表しており、井桁(伊)と藤で、前身の「いとう呉服店」を意味します。コリヤナギは非常に軽く、また、通気性に優れていることから、このタイプの旅行鞆が戦前重宝されました。

今年度も様々な展示を予定しておりますので、ご来庁の際にはぜひご覧ください。(文化財専門員 野本賢二)

平成28年度 こうとう情報ステーション展示内訳

回	展示品	回	展示品
1	真空管ラジオ	7	角乗・手古舞の絵葉書 各1点
2	ジェラール瓦	8	ポータブルレコードプレーヤー 1点
3	木場関係の絵葉書	9	角火鉢 1点
4	木場関係の絵葉書	10	イギリスから里帰りした絵葉書(亀戸天満宮) 2点
5	柳行李の鞆	11	戦前の洲崎公園銘板 1点
6	第18回夏季オリンピック東京大会関連の手拭い	12	『江東区役所新庁舎落成記念1973』 1点

お詫びと訂正

前号(277号)6頁2段目の記述のうち、松平陸奥守の蔵屋敷が「佐賀町にあった」との表現は必ずしも正確とはいえません。ここに削除とさせていただきます。お詫び申し上げます。